

# 「働く幸せ」考えよう

「第21回人間らしく働くための九州セミナー」が20日、北九州市戸畑区のウエルとばたで開幕した。九州各地を中心に、医療、教育、労働組合などさまざまな分野から集まった約800人が2日間の日程で、過酷な労働現場の実態や深化する貧困化の影響、アスベスト被害、メンタルヘルスへの対策などをテーマに討論を繰り広げる。

20日は、毎日新聞の労働専門記者から今年新聞労連委員長に就任した東海林智さんの記念講演、若年労働者を取り上げてのパネルディスカッション、夕食交流会が予定されている。21日は、午前が子どもの貧困をテーマにした特別企画と10会場に分かれての分科会、午後は大山康弘・日本理化学工業会長が登壇する市民公開講座がある。

分科会演題  
過去最高の107本

21日の分科会には過去最高の107演題が寄せられたため、実行委は会場を2カ所増設し、開始時間を午前8時半に30分繰り上げた。ただし第9分科会「職場のメンタルヘルス対策」はケアハウス、第10分科会「貧困・格差問題と健康」は戸畑けんわ病院と会場が離れているため午前8時45分開始。

## 2日目用弁当 午後3時締め切り

また、長崎大学教育学部の小西祐馬さんの基調講演とパネルディスカッションからなる特別企画「子どもの貧困と現代日本の働き方・働かされ方」は午前9時に始まる。それぞれ開始時間が異なるので参加者は注意が必要だ。21日午後1時15分からウエルとばた大ホールである市民公開講座は、まだ席に余裕があるので、申し込みをしてない人でも参加可能。この日は弁当の用意があり、20日午後3時まで受け付けホールで引換券を販売している。お茶付き600円。

(裏面に大協実行委員長あいさつ)

市民公開講座  
席に余裕あり

---

# 「なぜ」突き詰め討論を

現地実行委員会委員長  
大脇 為常

## 名称変更して初の開催

第21回人間らしく働くための九州セミナーin北九州に参加された皆さんに実行委員会を代表して心から歓迎のご挨拶を申し上げます。北九州市ではこれまで第3回と第10回の節目の集会を担わせていただきましたが、今回は名称変更されて初めての新たな出発をめざすセミナーでもあり、現地実行委員会一同大きな緊張感を持って取り組んでまいりました。現地ではこの間「働き方・働かされ方」をキーワードに5回の学習会を開き、北九州で働く労働者の実態・子供の貧困問題・メンタルヘルス・青年の状況・アスベストなど労働問題の矛盾が大きくなるのしかかる課題をとりあげ、論議を深めてきました。集会の中ではそれを踏まえて更に深い検討ができるよう実行委員一同張り切って準備してきました。

記念講演では毎日新聞記者で新聞労連委員長の東海林智さんから「労働の尊厳を取り戻そう～私たちの命を守るために」というテーマでご講演頂き、特別企画「子どもの貧困と現代日本の働き方・働かされ方」では長崎大学教育学部准教授の小西祐馬さんから「子どもの貧困への基本的視点」というテーマで問題提起をいただきます。

## 風化許されぬ餓死事件

数年前、北九州市はいわゆる餓死事件で日本中の注目を集めました。何故命を救えなかったのか、何故 SOS を感じとることができなかったのか、何故働く場を創出できなかったのか・・・、今一度感性を豊かにして「沢山の何故」をつき詰める事は、改めて「人間らしく働くこと」の意味を考える上で大切な契機であり、決して風化させてはならない出来事だと思っています。

市民公開講座でご講演いただく日本理化学工業会長の大山泰弘さんは、働くということは「人の為に動く」こと、そして「働いてこそ幸せになれる」と説いておられます。「日本でいちばん大切にしたい会社」(坂本光司氏著)の冒頭にとりあげられた知的障害者主体の会社の実践に基づいたお話には力強い説得力があり、私たち皆が大きく励まされることと期待しております。

## 国際的連帯の課題に

ILO が提唱する「ディーセントワーク・DECENT WORK 人間として価値ある労働」は国際的連帯の課題となっています。人間らしく働く為の 2009 熊本宣言の精神を真正面から受け止め、人間らしく働き、暮らせる職場・社会の実現を目指して、全力で取り組んでいかなければなりません。

労災職業病の枠を越えて、いま九州セミナーは更に大きな運動に発展しようとしています。学び・考え・実践する。皆さんの熱気あふれる討論をお願いし、また現地実行委員会の集会成功に向けての決意を改めて表明して、現地からのご挨拶とさせていただきます。

# 働く尊厳 取り戻そう

「第21回人間らしく働くための九州セミナー」は20日、会場のウェルとばた大ホールに立ち見が出るほど聴衆があふれ返った。



裏面に東海林さんの講演詳細

開会にあたって現地実行委員会の大脇為常委員長は「名称が変更されて初めてのセミナー。労災職業病の枠を越えて大きな運動に発展しようとしています。熱気溢れる討論をお願いします」とあいさつ。代表世話人会の田村昭彦議長は「人間らしく働く職場や地域を作っていくことや、働く人のいのちを守る、働くルールを作ること、働く労働者の権利を尊重することが大切だ」と訴えた。

記念講演として新聞労連の東海林智委員長が「労働の尊厳を取り戻そう～私たちの命を守るために」の演題で登壇。今日の労働をめぐる状況や、それに至るまでの背景、大企業が目指してきた利益追求の結果、犠牲になった労働者たちなどについて、自身の取材結果や具体的事例に基づいて説明。過酷な労働現場の状況を変えるため、聴衆に対して連帯を呼びかけた。

引き続き、若者の労働の現状を通して未来を考えるパネルディスカッションを開催。健和会職員の藤井広子さんがトップバッターに立ち、ハローワークを訪れた若者を対象にしたアンケート調査について報告した。パネルディスカッションの詳細は次号で紹介する予定。



## 国・財界が主導してきた利益追求のツケ

「2008年のリーマンショックは資本の暴走した結果である。そのツケが労働者へ回され、派遣切り、日雇い派遣村などの問題が起きた」。東海林さんは講演の冒頭、労働をめぐる今日の状況について話した。「日経連が1995年に『新時代の日本的経営』で示した三角形の構図は、正社員、有期安定雇用、不安定雇用と連なるピラミッドとなっている。現在の労働をめぐる状況を示す構図そのものであり、国、財界、大企業によって、政策的に誘導されていった結果だ」と説明した。

さらに「ここ数十年、大企業は労働者をモノとして扱い、自分たちの利益を最大限追求することだけを考えてきた。モラルが無いから派遣切りなんていう残酷なことをする」と続け、トヨタの過労死隠しやマクドナルドの名ばかり管理職といった大企業の悪びれない姿勢を、具体的事例を示して批判した。

## 私たちは人であってモノではない

最後は会場に「私たちは人であってモノではないという声を広げよう」と訴えかけ、「こんなでたらめな世の中は変えるためには、良識、正義のある人たちが連帯し、ルール、法律を変えなければいけない。心からの連帯をこめて、ともに頑張りましょう」とあいさつ。さらに、核廃絶のため英字の平和新聞を作成した新聞労連の取り組みも紹介し、記念講演をしめくくった。

第21回九州セミナーは21日、特別企画「子どもの貧困と現代日本の働き方・働かされ方」と、10カ所に分かれた分科会、日本理化学工業の大山泰弘会長による市民公開講座「働く幸せ～仕事でいちばん大切なこと」が行われる。午前9時からの特別企画は、長崎大学教育学部の小西祐馬さんによる講演「『子どもの貧困』への基本的視点」の後、公立学校事務の高津圭一さんら4人のパネリストを加えたディスカッションを予定している。

なお席に余裕

**市民講座「働く幸せ」**

13:15～15:30

裏面で時間・場所確認を

**テーマ多彩 10 分科会**

8:30～11:50

パネル討論 白熱期待

**特別企画「子どもの貧困」**

9:00～11:50

同時間帯にある分科会は、演題が過去最高の107本寄せられたため、事前に配布した資料とは一部会場や開始時間が変わっているので注意が必要だ。また、市民公開講座はなお席に余裕があるので、事前申し込みしていなくても参加可能だ。

20日のパネルディスカッションでは医療関係者や弁護士らが、貧困化する若者の窮状を報告し、いかにして救える社会にするか、意見を出し合った。約300人が参加した夕食交流会は、北九州市職労保育所部会による和太鼓の演舞などが披露された。

## 若者の窮状 救える社会に

パネル  
討論  
裏面に  
詳細

## 「1人1人の少しの勇気を新しい社会を作る一歩に」

パネルディスカッション「若者の労働から考える私たちの未来」で福岡県歯科保険医協会の杉山正隆さんは、患者の経済的理由で治療を中断した経験がある病院が4割に達するという調査結果を報告しながら、若者の健康破壊について「3000円ですべて治してとか、持っているお金の範囲内で痛みだけ止めて、などと言う患者がいる。厳しい労働条件のなかで来院できずに歯がボロボロになった若者や、お金がなくて子どもの虫歯の治療を断念した母親もいた」と報告した。

またNPO法人北九州ホームレス支援機構の奥田知志さんは、家はあるものの「こんな状況で帰っても親に迷惑をかける」などと言う若者ホームレスについて「助けてと言えない現実を生んだのは、政府、企業、社会の自己責任論なのではないのか」と訴えた。

それぞれの報告を踏まえての討論で、ハローワークで若者にアンケート調査をした健和会職員の藤井広子さんは「みんなこんな社会はおかしいと感じている。1人1人の少しの勇気を、新しい社会を作る一歩にしなくてはいけない」と訴えた。また介護福祉士の甲斐健吾さんは、過酷な環境に苦しむ若者の介護労働者に向け「さまざまな人との絆を大切に、労働組合にも興味を持ってほしい」と訴えた。最後に、コーディネーターを務めた九州社会医学研究所の田村昭彦さんが「若者の状況を矮小化してはいけない。世代を超えた現状把握と、輪を広げる重要性が大切だ」と呼び掛けた。

### 各分科会の時間と会場

8:30	第1～3分科会合同学習講座 ウエルとばた多目的ホール	生活と労働の場で事例を捉えよう
9:10	第1分科会 ウエルとばた多目的ホール	貧困化の進行と働く人びとの健康1
9:20	第2分科会 ウエルとばた 31・32 会議室	貧困化の進行と働く人びとの健康2
9:20	第3分科会 ウエルとばた 81・82 会議室	貧困化の進行と働く人びとの健康3
8:30	第4分科会 ウエルとばた 83・84 会議室	じん肺・振動病等、過労性疾患の労災補償と予防
8:30	第5分科会 ウエルとばた 121・122 会議室	アスベストによる健康被害
8:30	第6・7分科会合同特別報告 生涯学習センター第1集会室	看護労働の実態
8:50	第6分科会 生涯学習センター第1集会室	ヒューマンサービス労働者の健康1
9:00	第7分科会 生涯学習センター第3集会室	ヒューマンサービス労働者の健康2
8:30	第8分科会 生涯学習センター第2集会室	職場の労安活動
8:45	第9分科会 ケアハウスらいふ戸畑	職場のメンタルヘルス対策
8:45	第10分科会 戸畑けんわ病院5階会議室	貧困・格差問題と健康
12:00	ウエルとばた大ホール	全体集会

# 明るく働ける未来へ

第21回九州セミナーは21日午前、特別企画「子どもの貧困と現代日本の働き方・働かされ方」と、10会場に分かれての分科会があった。

特別企画では長崎大学教育学部の小西祐馬さんが「子どもの貧困」への基本的視点について講演。「教育費の高い日本では、子どものいる世帯の6割が苦しいと考え、将来を悲観しながら暮らしている」などと訴えた。講演に引き続いてパネルディスカッションがあり、教育・医療・法曹の各分野から計4人が登壇し、意見を交わした。

## 次は宮崎

分科会は過去最高の107人が演題を提出した。約50人が参加した第5分科会では、建設現場での肺ガン・中皮腫・アスベスト肺などについて紹介するDVDビデオを上映した。戸畑けんわ病院医師の高尾安司さんは「石綿被害は暴露から40年後に発症する場合もあり『時限爆弾』と言われている」と解説。13人の報告者が、各地の取り組みなどについて説明した。

メンタルヘルス対策をテーマにした第9分科会には47人が参加。臨床心理士の中村美穂さんが「労働者は職場の人間関係でストレスを感じる人が多い。心や体がストレスを感じることは正常なこと。自分のストレスの特徴をつかんで、得意な対処法を見つけることが大切だ」と訴えた。

分科会の参加者は主会場のウェルとばた大ホールに戻り、正午からの全体集会を経て、2日間にわたって行われたセミナーを終える予定。第22回は来年11月5～6日に宮崎市で開かれる。

来年11月5～6日

どげんか行かんといかんばい

裏面に特別企画「子どもの貧困」の詳細

## 子ども時代を大切にしよう



特別企画「子どもの貧困と現代日本の働き方・働かされ方」の基調講演で長崎大学教育学部の小西祐馬さんは、広がる貧困の現状や、虐待と貧困の関係性、貧困は世代間連鎖すること、子どもが貧困であることの問題点について示し、反貧困の方向性について問題提起した。

貧困の現状として、子どもの7人に1人が貧困であること、日本特有である就労有無に関わらず母子家庭の貧困率は高いことや再分配後の方が高い貧困率などを数字をもとに示した。また、ひとり親世帯や経済的困難により子どもの虐待がおこってしまう「貧困と虐待の関係性」や、生活保護の2世代にわたる受給や母子世帯の半数が子ども時代に経済的困難であったことなど「貧困の世代間連鎖」についても明らかにした。

これらの実態を踏まえ、「子どもの貧困がのちの成長・発達に大きな影響を及ぼすこと、子どもの貧困をなくすためには個々の親や家庭に責任を押し付けるのではなく、社会全体で解決していかなければいけない。そのためには子どもの教育・保育が大切」と話し、他国の先進的な子どもの教育・保育政策について紹介した。また、日本の反貧困の方向性として子ども手当や高校授業料無償化など世の中の関心・取り組みの広がりについても紹介し、まだまだ課題もたくさんある中、私たちは何をすべきかを問題提起した。

## 交流会に 300人

20日の夕食交流会には約300人が参加。北九州市職労保育所部会による力強い和太鼓演舞で開会。代表世話人会の民放労連・逸見明正さんの挨拶に続き、北九州市職労の磯田英実委員長が乾杯挨拶を行った。門司港名物バナナのたたき売りがあり、軽快な音頭にのせられて出席者は次々と買い求め、用意されたバナナは瞬く間に売れた。門司港マスコットのじーも君とバナナマンも応援にかけつけ、企画を盛り上げた。長崎県代表は「沖縄を返せ」の歌を披露。次回開催する宮崎県代表は「来年は宮崎にたくさんの報告演題を」とあいさつした。会場には終始賑やかな声がひびきわたっていた。